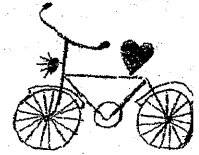


〔昭和35年度卒業生〕



湘南砂丘地帯の地形と土地利用

飯田 良子

調査地域として、湘奈川県藤沢から平塚にかけて広がっている、所謂湘南砂丘地帯を選び、この砂丘地帯の地形、主として地形分類とその上に展開する土地利用について調査を行った。

まず、地形は砂丘地帯と相模川沖積地帯とに大別される。地形分類は2.5万分の1地形図及び4万分の1空中写真により行い、次の五つに分類した。

1. 起伏ある砂丘
2. 平坦な砂地
3. 砂丘間の後背湿地
4. 微隆起沖積面
5. 掘河床沖積面

砂丘地帯は、片瀬境川以西、大磯地塊の東を流れる花水川に至る延長約16 Kmの汀線から内陸へ、約5 Kmにわたり中広く分布する。この砂丘の起伏のあるものは、相模川をはさみ東西に分布状態を異にする。即ち東側のものは概して南西—北東方向に走るのに対し、西側のものは東西方向に伸びている。北高は東側で2~7m、西側では低く2~4mでその上平塚市街地をのせているのであまり明瞭には認められない。砂丘上の土地利用は、畑地になっているものもあるが、松林のまま残っているものが多い。近年はこのような砂丘上も住宅地として開かれつつある。

一方、平坦な砂地はかなり広い部分を占め、多少の起伏は有するが低平な砂地帯で市街地が広がり、その他畑地としても利用されている。この砂丘地帯最上部には、珪砂を除いて径0.5~1.5cmの次黄次日巴の *quartz* が降りしている。分布状況は不規則で露折により厚さ、粒径が異なるが、起源は宝永火山のものと思われる。

砂丘の形成過程を考えると、この地一帯は遠浅な海であったとき、相模川が上流山地より土砂を運びながら延長河川となって、その間に遠浅な海岸が徐々に隆起し、浜長列が順次形成されていった。その後、この浜長列が基底となって、この地域の卓越風が砂を撓乱して、現在のような砂丘地帯が形成されたのではないかと思われる。

後背湿地は、砂丘地帯の間に砂丘の方向と大体一致して分布する。砂丘地帯との比高は一般に0.5~0.8mで湿田となっている。

微隆起沖積面は、主として相模川兩岸の流域に広がっている。相模川の堆積物によって形成された三角洲性の沖積地であり、堆積しながら徐々に隆起したと思われる。起伏は殆んどなく、比高は砂丘地帯から0.5~0.8mで漸移している。土地利用は集落、工場用地、畑地となっている。

観河床沖積面は、相模川、粕木川などの河川流域に点在する。この面は微隆起沖積面が現在の河川に削られて作られたものと、相模川の堆積物の堆積過程で埋め残されてできた湿地との二種類に分けられる。微隆起沖積面との比高は場所により異なるが、1m前後で湿田として利用されている。

土地利用は、先ず農業土地利用状況は、この地域が砂地帯であるため畑の占める割合が多い。田は殆ど湿田で一毛作田が多い。作物別には、砂地農業の特色である甘藷、落花生から近年は蔬菜栽培に重点が移り、夏のトマト、ナス、キュウリ、冬の露地苺栽培が盛んになってきている。最近殊に市街地の発展により農地の喪失が著しく、土地の高度利用化の点からも、また、ビニールハウスやビニールトンネルの普及により更に蔬菜栽培は重要になるであろう。この農地喪失問題と共に、旱魃、飛砂による風蝕害など砂丘地帯の農業は色々問題をもっている。

この地域はまた大都市東京、横浜に近く、日本の主要幹線である東海道沿線にあるという交通条件と、温暖な気候条件にも恵まれているため、農業的土地利用から、住宅地、工場用地、観光地などの都市的土地利用に移り変わりつつある。

住宅地は、初め湘南の別荘地として出発したこの地も、交通機関の発達により東京、横浜などとの時間的距離も短縮され、通勤圏として急速に住宅地化されつつある。

工場用地としては、京浜工業地帯が数地帯大の面で限界に達して来ているので、工業の内容は異なるが京浜地区の延長として特に食品、金属、機械、化学を中心とする工業の発展が期待されている。立地条件の点からみると、交通条件が大きな利点となっている。

観光地としては、片瀬から大磯に至るまでの海浜を、湘南海岸公園として整備し、リゾートエイションの場としての施設を設ける計画が立てられている。現在はその一部が完成をみたのである。

このように、湘南砂丘地帯は、都市的土地利用化が進められているが、これらと従来の農業土地利用との調整には、種々困難な問題を伴っている。